研究ノート

ジュール・ヴェルヌ〈驚異の旅〉を歩きそこねる —— モナコ篇

三　枝　大　修

ジュール・ヴェルヌ (Jules Verne, 1828-1905) の長篇小説『シャーンドル・マーチャーシュ』[1)]には，全 35 章中 2 章だけだが，モナコとその周辺を舞台に物語の展開される箇所がある（第 4 部第 3 章・第 4 章)。これを本稿では《モナコ篇》と呼ぶことにしよう。

2019 年度，私は成城大学の海外研修制度を利用してフランス南部の街モンペリエに滞在した。モンペリエからモナコまでは電車を乗り継いで片道約 6 時間かかるため，決して近くはない。が，目眩がするほど遠いというわけでもない。そのため，《モナコ篇》については以前から気になる点があったこともあり，モンペリエ滞在中に一度はモナコを訪れてみよう，と渡仏する前から心に決めていたのだった。

結局，2019 年 9 月 12 日から 15 日にかけての 4 日間 —— 実質的には移動日を差し引いての 2 日間 —— 私はモナコにおもむいて調査を行った。その目的は，ひとことで言えば以下の二つである。

・《モナコ篇》の登場人物の足どりを実際にたどってみること。
・《モナコ篇》の挿絵に描かれた場所を特定すること。

1)　本稿における『シャーンドル・マーチャーシュ』の引用は初版挿絵本 (Jules Verne, *Mathias Sandorf*, Paris, J. Hetzel, coll. «Les Voyages extraordinaires», 1885, in-8°)から行い，引用文直後の亀甲括弧の中に参照箇所の頁番号を記す。なお，本稿におけるフランス語文献の引用はすべて拙訳である。

以下の文章は，モナコ周辺でのそのフィールドワークの結果報告である。まず『シャーンドル・マーチャーシュ』《モナコ篇》のストーリーを紹介し，私の関心がどこにあるのかを示す。次いで，2日間の現地調査のあらましと，その成果について詳述する。

1.《モナコ篇》のあらすじ

『シャーンドル・マーチャーシュ』第4部第4章には，母国フランスを描くことがきわめて稀であったヴェルヌの作品としては珍しく，フランスが登場する。割かれた頁数にしてみればごくわずかだが，それでも，モナコ公国の北西に位置するラ・テュルビー，それからそのさらに南西に位置し，現在では「鷲の巣村」の観光地として有名なエズ[2)]の村の近辺を，数名の登場人物たちが通過していくのである。だが，それはいかなるコンテクストにおいてであったのか。

頭は切れるが道徳心のかけらも持ち合わせていないサルカニーと，そのサルカニーに弱みを握られ，金を搾りとられている元銀行家シーラス・トロンタル。賭博に目がない二人はモンテカルロのカジノでゲームに負けつづけ，トロンタルの往時の財産はもはや見る影もない。そんな状況下で，《モナコ篇》の物語の幕は開ける。

ある晩，モンテカルロの年代記にさえ残るのではないかと言われるほどの大敗を喫した二人の賭博師は，ホテルに帰って一夜を明かしたあと，翌日もまたカジノに舞い戻っていく。午後に一度，二人は前夜の大損を取りかえすほどの大勝利をあげるが，サルカニーに焚きつけられたトロンタルは夕食後にもカジノを再訪して派手な勝負を展開し，ついに破産してしまう。

2)　この村の名前は，フランス語では「エズ」(Èze) だが，イタリア語やニサール語（ニース方言）では「エザ」(Eza)。ヴェルヌは作品中で後者の表記を用いている。

〔午後〕10時に，シーラス・トロンタルは最後の賭け金を限度額いっぱいで賭けた。一度は勝ち，次にまた負けた。頭がくらくらした。いっそのこと，クラブのホールがすべて倒壊し，ひしめき合う連中もろとも自分を押しつぶしてくれればいい。そんな凶暴な願いに捕らわれたまま立ちあがった彼の手には，もう何ひとつ残されてはいなかった。シャーンドル伯爵の莫大な財産を元手に再建した自分の銀行，そこから受けとった巨万の富がもはやゼロになっていたのだ。〔447〕

こうして全財産を失った元銀行家はショックと興奮のあまり狂乱状態に陥り，あらぬ方向へと駆けだしていく。なぜかモナコの背面にある急な斜面を登りはじめるのである。

シーラス・トロンタルは，彼のことを見張る牢番のようなサルカニーを連れて賭博室を出ると，ロビーを抜けてカジノの外へ駆けだした。それから二人は庭園を突っ切り，ラ・テュルビーにのぼる山道の方へ逃げていった。〔447〕

ラ・テュルビーというのは，当時もいまも，モナコに隣接するフランスの街である。走ったり，また歩調を緩めたりしながら，トロンタルとサルカニーは気まぐれに蛇行するジグザグの道を登っていく。詳しい説明は省くが，彼らを追跡する別の二人組もいて，こちらは言わば「善玉」の青年たち，ポワント・ペスカードとカップ・マティフーだ。

サルカニーとシーラス・トロンタルは連れだって歩きつづけていた。そして，山腹の曲がりくねった小道を登り，少しずつ高い場所へと移動していた。山道は，オリーヴやオレンジの木々の茂る庭園のあいだを蛇行しており，その気まぐれなジグザグのおかげで，ポワント・ペ

スカードとカップ・マティフーは二人を見失わずにすんだ。〔447〕

すでにトロンタルはサルカニーに対する態度を硬化させており，いくら相棒がモナコに戻ろうと呼びかけても決して応じようとしない。おのれの破産が決定づけられた場所であるモンテカルロから，一刻も早く遠くへ逃げ去りたい一心なのである。

シーラス・トロンタルには自覚がなかったが，彼は一歩を踏みだすごとに切り立った崖下の谷に転落する危険を冒していた。つづら折りの山道は，崖の上を曲がりくねっていたのだ。銀行家はただひとつの考えにとらわれており，それがほとんど強迫観念になっていた。すなわち，自分が完全に破産することになった場所，モンテカルロから逃げること。こんな悲惨な状態に自分を追いこんだ助言の主，サルカニーから逃げること。つまり，どこへ行くべきか，自分がこれからどうなるのかはよく分からないが，とにかく当てずっぽうに逃げることだ！〔449〕

かくして元銀行家は険しい山道をのぼっていく。そしてサルカニーを振りきり，ついにラ・テュルビーの中心部に到達する。

じきに彼はラ・テュルビーの目抜き通りまでたどり着いた。イタリアとフランスの昔の国境，アジェル山塊と「犬の頭」とを隔てる狭い鞍部にのびている通りだ。〔450-451〕

ところが，何という馬力なのか，休憩をとることもなく，トロンタルはそのままラ・テュルビーを素通りする。モンテカルロのカジノを出たのは22時過ぎだったから，もう日付も変わっているのかもしれない。正確な

時刻は知るすべもないが，少なくとも街は深閑としている。

> 元銀行家はラ・テュルビーの街路を勢いよくのぼっていた。アウグストゥスの塔をいただく小さな丘を左手に残し，すでに門を閉ざしている家々の前を駆けぬけて，とうとうコルニッシュ街道に出た。〔451〕

トロンタルの爆走はなおも続く。ラ・テュルビーの街を出て，今度はコルニッシュ街道だ。

> コルニッシュ街道というのは，古代ローマの街道の名残であり，ラ・テュルビーから山の中腹を通ってニースへと下っている。その周りは堂々たる岩石や孤立した円錐丘，海岸沿いに敷設された鉄道の線路まで真っ逆さまに落ちてゆく断崖絶壁である。〔451〕

だが，そのコルニッシュ街道にも長居はしない。ラ・テュルビーを出て早々，今度はエザへと針路を変更するのである。

> シーラス・トロンタルは，ラ・テュルビーの街を出るあたりでコルニッシュ街道から外れ，エザへと直行する小道に駆けこんでいった。エザというのは，松とイナゴマメの群生地帯の上の岩山に勇ましくのった，なかば未開の人々が住む「鷲の巣村」の一種である。〔452〕

しかし，そのエザの村にヴェルヌの登場人物たちが到着することはない。というのも，トロンタルはそこに至る前になおも道を曲がり，海沿いの崖の方へと方向転換してしまうからだ。

> 正気を失った男は，歩調を緩めることなく，一度として後ろを振りか

えることもなく，しばらく道なりに進んでいった。そして，不意に左に曲がると，海岸の断崖のすぐそばを通る狭い山道にとびこんだ。崖下には，鉄道の線路と馬車の通れる道路とがあり，いずれもトンネルの中を通っていた。〔452〕

元銀行家は断崖の上で足をとめ，投身自殺を図る。が，追ってきた青年二人に捕まって，身投げは阻止されてしまう。サルカニーもまた相棒を厄介払いしようと密かに追跡を続けていたのだが，青年たちに顔を見られるのを恐れて姿をくらます。

100歩ほど先で，シーラス・トロンタルがようやく足をとめた。断崖に突きだした岩の上に跳びのったところだった。その数百ピエ〔1ピエ＝32.5cm〕下では波が断崖にぶつかって砕けている。
シーラス・トロンタルは何をするつもりなのか？　自殺しようという考えが頭をかすめたのか？　もしそうだとすれば，この深淵に飛びこんで，惨めな人生に終止符を打とうと思っているのか？
〔……〕いまにも身投げしようというその瞬間に，シーラス・トロンタルはカップ・マティフーにつかまれて路上に引きもどされた。
〔452-453〕

それからペスカードとマティフーは，無気力状態に陥った元銀行家を抱えて山道を下り，高速船エレクトリック号に乗ってコート・ダジュールをあとにする。《モナコ篇》の終幕である。

2. リアリズムの問題

『シャーンドル・マーチャーシュ』《モナコ篇》について以前から気になっていたこと。それは，ごく素朴な問いではあるが，「いくら無我夢中で

あったとはいえ，シーラス・トロンタルにこんな距離，こんなハードな山道が歩き通せるのか？」というものだった。ヴェルヌの連作〈驚異の旅〉には，必然的に「旅」すなわち長距離移動のシーンが多く，なかにはそれこそ驚異的な体力・精神力の持ち主で，1 日に 40km ほどであれば軽々と踏破してみせる登場人物も少なくない。だが，身体能力に優れた軽業師の二人（ペスカードとマティフー）や海賊組織の一員としても活動するサルカニーはともかくとして，日頃運動とは何の縁もなさそうな中年（52 歳前後）の元銀行家に夜を徹しての山登りなどできるものなのだろうか。

漠然とした印象をもとに議論をしても埒があかないので，まずは彼が踏破したと考えられる距離を整理しておこう。トロンタルは，モンテカルロのカジノを出てひとまずはラ・テュルビーへと向かう。この二点間の距離を試しにグーグル・マップの距離測定機能で測ってみると，2.3km である。だが，実際にはこの二地点を直線的に結ぶ道など存在しないうえ，両者のあいだには 500 メートル近い標高差があるため[3]，モナコからの徒歩での移動は，「山腹の曲がりくねった小道」を行く実質的な山登りとならざるをえない。それに，具体的な経路まで特定しようとするのであれば，「蛇行」「ジグザグ」「つづら折り」といった小説中の表現から判断して —— また，モンテカルロとラ・テュルビーとをつなぐ適当な道がほかに見当たらない以上 —— トロンタルは現在の地名でいえばボーソレイユの市街地を抜けて中部コルニッシュ街道に至り，蛇行する北アフリカ戦闘員通りとボーソレイユ街道を登りきったあと，マントン街道を西進したにちがいない，と推測される[4]。この経路でモンテカルロからラ・テュルビーまでの距離を測ってみると，約 6km である。

3）　海抜約 20 メートルに位置するモンテカルロのカジノに対し，ラ・テュルビー中心部の標高は約 500 メートルである。

4）　ここで言及した地名の原語表記はそれぞれ「Beausoleil」「Route de la Moyenne Corniche」「Avenue des Combattants en Afrique du Nord」「Route de Beausoleil」「Route de Menton」。

次に，トロンタルはラ・テュルビーを出たあと，小説内では「コルニッシュ街道」と呼ばれている現在のニース街道を少しのあいだ進み，続いて――「コルニッシュ街道から外れ，エザへと直行する小道に駆けこんでいった」〔452〕とあるので――道が二つに分岐している地点からは，ディアブル・ブルー通りではなくラ・テュルビー街道の方に入っていったのだと推測される。しかし，小説では結局エザまで行くことはなく，途中でさらに「左に曲がる」〔452〕と書かれているので，トロンタルは最終的に――それと名指されることはないが――エステル岬の崖の上にたどり着いたのだと考えざるをえない[5)]。実際，「崖下には，鉄道の線路と馬車の通れる道路とがあり，いずれもトンネルの中を通っていた」〔452〕という小説内での描写に合致する場所は，モナコとエズのあいだの海岸線上に限っていえば，ここしかないのである（通行する車両が「馬車」から自動車に替わっただけで，このトンネルは現在も使用されている）。なお，ラ・テュルビーからエステル岬の崖上までの直線距離は3.5km。上記の経路に沿って道なりに移動した場合は，それが約4.5kmにまで拡大される。

つまり，《モナコ篇》でのシーラス・トロンタルのように，モンテカルロのカジノを出てからラ・テュルビーを経由してエステル岬の端にまで移動した場合の歩行距離は，優に10kmを超えるのである[6)]。しかも，それはあくまでも水平の移動がなされた距離にすぎないのであって，実際にはそこに標高500メートル分の山登りの負荷も加わってくる。

一般論として，高低差500メートル，距離10kmの移動が可能かどうかといえば，それはもちろん可能だろう。登山であれば，標高差，山行距離ともまったくもって初心者向けの数値にすぎない。しかも，《モナコ篇》

5）　ここで言及した地名の原語表記はそれぞれ「Route de la Corniche」「Route de Nice」「Avenue des Diables Bleus」「Route de la Turbie」「Cap Estel」。

6）　ちなみに，《モナコ篇》の登場人物たちが実際に足を踏み入れることはないが，エズの村に，モンテカルロからラ・テュルビー経由で道なりに行った場合の距離も9～10kmである。

の登場人物たちは —— カジノでトロンタルが破産するのが 22 時過ぎ，そのトロンタルを担いで青年二人が山道を下りきるのが「夜が明けようとするころ」〔453〕なので —— この移動にはまるまる一夜をかけており，時間についてはかなり潤沢に使うことができたはずだから，なおさらである。

だが，シーラス・トロンタルはあくまでも心身の強靱さとは無縁の「ひ弱な人間」〔429〕として描かれており，高級ホテルに逗留しながら賭け事にうつつを抜かす有閑階級の中年紳士にすぎない。〈驚異の旅〉におなじみのバイタリティあふれる若者たち，軍人たち，狩人たちからはほど遠く，そもそも深夜の山登りがしたかったわけでもそのための準備ができていたわけでもないのである。モナコの北の山への登攀が，格式あるモンテカルロのカジノを出た直後に開始されている以上，元銀行家は服装や靴についても正装かそれに近い格好をしていたはずで，10 月 4 日という日付からすれば，たしかに暑すぎも寒すぎもせず，気候の面では恵まれていたと言えるかもしれないが，運動に不向きの者が運動に不向きの格好で尋常ならざる運動をした，という事実については何ら揺らぐところがない。つまり，ここで問われるべきは小説のリアリズムなのである。

というわけで，私はモナコを訪れることができた暁にはぜひともこのトロンタルの足どりをたどり，それがどれほどの身体的負荷をともなう行程だったのかを身をもって確認しようと念じていたのだが，それが曲がりなりにも実現できたのは，昨年の 9 月 13 日，モナコにおけるフィールドワークの実質的な初日であった。

3. シーラス・トロンタルを追いかけて ——フィールドワーク 1 日目

モンペリエ，モナコ間の移動にまるごと費やされた 9 月 12 日の翌日，私はまずラ・テュルビーまで徒歩で行けるものなのかどうかを検証しようとモンテカルロのカジノを起点に歩きはじめた。モナコ公国の国境はすぐに越え，フランス領のボーソレイユという街を通過していくのだが，この

あたりの坂の傾斜，階段の数はすさまじく，斜面に造られた市街地を登りきったところにある中部コルニッシュ街道に出たあたりですでに息が切れている。ここまでで，30分ほど。気象データサイトで確かめてみたところ，その日のモナコの最高気温は26度だったようだが，コート・ダジュールの太陽はすこぶる強烈で，日なたを歩いているとたちまち溶けそうになる。

だが，もちろん本番はそこからだ。《モナコ篇》であれほど強調されていたジグザグの山道，すなわち北アフリカ戦闘員通りとボーソレイユ街道を登っていかなければならない。

ところが，さっそくここで想定外の壁に突きあたる。北アフリカ戦闘員通りは，なんと完全なる車道だったのである。交通量はそう多くはなさそうだが，たまたま車が通行するときに居合わせると，この通りに迷いこんだ歩行者にはまったくと言っていいほど逃げ場がない。最初のカーブまでの250メートルほどは意を決して登ってみたが，歩道というものの存在しない空間がはるか彼方まで続いているのを確認し，それ以上進むのは断念。トロンタルの足どりを忠実になぞるという実験は早くも頓挫してしまう。

というわけで，徒歩は諦めて次善の策を講じるしかないので，丘の上にあるラ・テュルビーまでは，モンテカルロとこの街とを結ぶ路線バスに運んでもらうことにする。停留所を見つけてルートを確認してみると，幸いなことに11番線のこのバスは，トロンタルがたどったと思われる道のりをほぼ忠実にトレースしてくれるようである（モナコとラ・テュルビーのあいだにはほかに適当な道がないので，当然といえば当然なのだが）。

かくして本数の少ないバスを待ち，ようやく来たものに乗りこむと，カーブの多い窮屈な道を行くせいか，車体がコンパクトで20席もない。進行方向を向いた快適そうな席はすべて埋まっており，さりとてカーブのたびに大きく揺れるのは目に見えているので，立ったままでいるのもはばかられ，仕方なく進行方向とは逆向きの席に座る。バスは，先ほど私が徒歩

で登るのを断念したジグザグの道を，何度も急カーブで折り返しながら順調に登っていく。そして，坂を登りきると今度は西に進路をとり，ラ・テュルビーの中心部を目指す。

窓越しの景観に気をとられていて乗車時間は計りそこねてしまったが，11 番線の運行時刻表をあとから確かめると，モンテカルロのカジノから終点のラ・テュルビーまではバスで 30 分もかかっているようである。あいにく実際に歩くことはできなかったが，ヴェルヌの登場人物たちのように徒歩でこの道を移動したのであれば，距離の面でも高低差の面でも相当な体力と時間を要する山登りになっていたことはまちがいない。

ラ・テュルビーでバスを降り，中心部へ向かう。小さいだろうとは思っていたが，街は本当に小さく，ヴェルヌの言及している古代ローマ遺跡「アウグストゥスの塔」（**写真 1**）もすぐに見つかる。トロンタルはこの街を素通りしたようだが，私までそれに倣う義理はないので，カフェで簡単に昼食をとり，入場料を支払って塔の敷地内に入る。すると，遺跡そのものもさることながら，敷地の端から見下ろすモナコ市街の眺望が素晴らしく，誰もいないベンチに座り，しばし時を忘れて眺め入ってしまう（**写真 2**）。

ラ・テュルビーをあとにして，今度は徒歩でエズを目指す。地図で見る

写真 1　アウグストゥスの塔

写真 2　ラ・テュルビーから見下ろすモナコ市街

かぎりでは4kmほどの距離か。しかし，愚かにもそこで私は道を誤ってしまう。単に目の前に延びる車道（ニース街道）の脇の歩道を行けばよかったのだが，右側に見つけた小道がなぜか魅力的に思えて，そちらに足を踏み入れてしまったのだ。トロンタルが最終的に到達した場所はエステル岬だろう，という先述した結論にはその時点ではまだたどり着いておらず，とにかくエズの村を目指せばいいのだと誤解していたうえ，ヴェルヌの原文に「〔トロンタルは〕ラ・テュルビーの街を出るあたりでコルニッシュ街道から外れ」たとあるのを早合点し，私もまた早々に「コルニッシュ街道から外れ」た結果，進むべき方向とはほとんど逆向きの小道に入りこんでしまったのである。

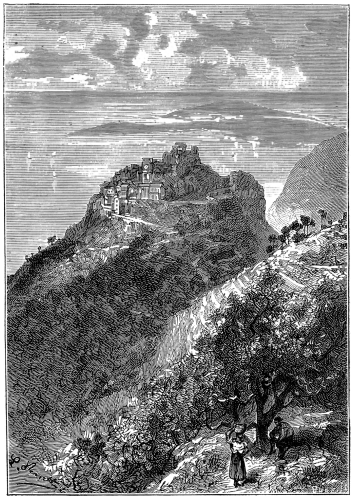
とうてい歩行者しか入れそうにないその小道は，あらためて調べてみるとフォルナ通りというのだが，その道の入口には，ここを進むとエズ峠に行けますよ，という案内板が立てられていた[7)]。そのエズ峠をてっきりエズの村のことだろうと思いこんだのが間違いの元だ。実際には，エズ峠はエズの村から1km以上離れた場所にあり，しかも「峠」というだけあって，海抜420メートルほどのエズの村よりもさらに80メートル高いところに位置しているのである。

というわけで，草深い山道を歩くこと1時間以上，何とかたどり着いたそこがエズの村ではないということに気がついて，私はひとしきりショックを受ける。だが，かなりの高所であるだけに，そこから見下ろす地中海の眺望の美しさときたら，魂がどこかへ連れ去られそうになるほどだ（**写真3**。なお，《モナコ篇》の挿絵にもエズの村の描かれたものがある。**図版1**参照）。

エズの村も，たしかに眼下に認められはするのだが，すでに疲労は濃く，あそこまでまだこんなに距離があるのかと思うと途方に暮れざるをえない。が，かたわらに建っているルヴェール要塞の広場でしばし休憩をとったあ

7）　ここで言及した地名の原語表記はそれぞれ「Chemin de la Forna」「Col d’Èze」。

写真 3　ルヴェール要塞から見下ろすエズの村



図版 1　エザ（エズ）

と，意を決して急な坂道を下りはじめる。これがまた，何の罰ゲームかと思われるほどのものすごい急勾配で，少しでも気を抜くと足首や腰を痛めそうだ。

さらに 1 時間ほど歩いただろうか，かろうじて下まで降りきると，そこはエズの村の前。この村には 20 年前に足を踏み入れたことがあるはずだが，何ひとつ覚えていない。中をざっと歩いてはみたものの，やはり何も思い出せない。観光地化されすぎたこの村は，あまりにも清潔で，まるでおもちゃのようだ。ゴミひとつ，犬のフンひとつ落ちていない。石造りの家々が，ひたすらフォトジェニックな路地を展開するばかりである。

日没が近づき，商店も軒並み閉まりはじめたので，村は早々に立ち去り，「ニーチェの道」という散策路を通ってエズの鉄道駅まで降りてゆく。20 時前後だっただろうか，海べりの駅に着くころに，タイミングよく陽が沈んだ。そして，そこで電車を待ち，すっかり暗くなってから 2 駅先のモナコへと帰った。

シーラス・トロンタルの足どりを実際にたどってみるという当初の目的からいえば，「つづら折りの山道」はバスに乗ってのスキップを余儀なくされたし，ラ・テュルビーからエステル岬へと至る道もまるごと歩きそこねてしまったので，大きく失敗した感は否めない。だが，ルートは違えどモナコからラ・テュルビー，ラ・テュルビーからエズへという移動を一日で実践できたのは，〈驚異の旅〉のごくわずかな部分であるとはいえ，ヴェルヌの小説に描かれた運動をおおむねなぞり，その雰囲気を体感することができたという意味で，貴重な経験であった。

4. ふたたびリアリズムの問題

モンテカルロからラ・テュルビー経由でエステル岬へ。結論からいえば，いくらまるまる一夜を費やしたとはいえ，中年の元銀行家が一度の休憩もとらずに一息に歩きとおすには，あまりにも長い距離，険しい道のりである。その前半部分，ラ・テュルビーまでの移動に限っても，ジグザグの上り坂を実地に目にしたいまとなっては，カジノで遊んでばかりいる紳士たちがあの急斜面を一気呵成に登りきれるとは思えない。《モナコ篇》のあのシーンはやはり現実離れしていると断じざるをえないのではないか――それがいま，モナコにおもむいて物語の舞台をおおむね検分することのできた，私の印象である。

実際，標高差500メートルの山道を10km強歩くというのは，登山家にとっては凡庸な移動にすぎないだろうし，有閑階級の紳士たちにとっても決して不可能ではないだろうが，だからといって，それを深夜に強行することが自然な振舞いであるとは思えない。あの場面でのトロンタルの行程は，〈驚異の旅〉の読者のうち，当時のモナコを知る人々にとっても理解しがたかったのではないだろうか。そして，おそらくはヴェルヌ自身も，その点については自覚的だったのである。というのも，不自然を自然に，非現実を現実に見せかけるために，小説家は，破産直後のトロンタルの錯

乱した様子を強調し，その逃避行の続くあいだは時刻への明示的な言及を避け，さらには移動中の地理への言及すら最小限に留める，という複数の戦略を同時に展開しているように見えるからだ。

元銀行家は深刻なパニックに陥り，無我夢中であったからこそ，やみくもに山道を進んでいくことができた。逆に言えば，どこかで反省的思考がはたらき，正気と冷静さとが取り戻されていたら，あれだけの馬力を発揮することなどとうてい不可能だっただろう —— そのような印象を読者の頭に刷りこむことで，トロンタルの錯乱は，壊れた機械のようなその爆走ぶりをリアルなもの，ありうるものとして正当化している。すなわち，小説にリアリティを供給するための装置のひとつとしてそれは機能しているのである。

また，《モナコ篇》の作者は，おそらくは意識的に，トロンタルがカジノを飛びだしてからの時刻の推移をテクストに書き入れることなく物語を進めている。つまり，一夜というおおざっぱな枠組のみを設定し，場面ごとの正確な時刻は読者に伝えないことで，登場人物たちの長距離移動のペースが —— 速すぎたり遅すぎたりして —— 非現実的であると判断されるリスクを周到に回避しているのである[8)]。

そして，地理の不鮮明化。この点については，〈驚異の旅〉の出版人ピエール＝ジュール・エッツェル (Pierre-Jules Hetzel, 1814-1886) も，現在のモナコの地理にあまり明るくないのであれば，トロンタルの足どりを詳細に書きこむのは避けておいた方がよい，とヴェルヌに忠告している。モナコのように知名度の高い場所については，描写に誤りがあると，それがただちに読者に看取されてしまうからである。

---

8) 事実，夜間とは対照的に，この日の日中の出来事については，「その日の午前中」〔441〕，「午後 1 時頃に」〔441〕，「時刻は午後 3 時だった」〔441〕，「4 時の鐘が鳴っていた」〔442〕，「4 時から 6 時のあいだに」〔442〕，「6 時半に」〔443〕，「30 分後には」〔444〕，「8 時頃」〔444〕，「10 分後に」〔446〕という具合に時刻が細かく書きこまれている。

知ってのとおり，君が最後に訪れたときからモンテカルロやモナコは激変した。エザやラ・テュルビーといった集落，コルニッシュの下の街道も多くの点で変わったし，トロンタルのような状態に陥った者が，山の上から海にそのまま身投げできるような場所はほとんどない。
君の地理の描き方は検討し直す必要がある。もし可能であれば，特にそのためにモナコをいずれ再訪した方がいいと思うが，それが無理なら，トロンタルの歩みをいちいち正確に書くのは避けた方がいいだろう。ありえない道のりをたどらせることになってしまいそうだし，これほどよく知られた土地については間違いを犯してはならないからだ。誤りがあると，もっとなじみのない土地について君が何を書いたとしても，読者に信用されなくなってしまう。[9)]

この助言を容れてのことなのかどうかは分からないが，少なくとも草稿を見るかぎりでは，ヴェルヌは《モナコ篇》推敲の過程において，地名への言及を減らしている[10)]。例えばラ・テュルビーへと続く道は，草稿の第3巻44頁で，「サント・デヴォットの谷に沿って曲がりくねる山道」と言い換えられているのだが，この表現は，活字となった『シャーンドル・マーチャーシュ』のテクストには見当たらない。つまり，「サント・デヴォットの谷」という固有名詞は，結局のところ，ヴェルヌのこの作品には一度として登場することがないのである。また，トロンタルがエステル岬の

9）　Lettre de Pierre-Jules Hetzel à Jules Verne du 7 décembre 1884, *Correspondance inédite de Jules Verne et de Pierre-Jules Hetzel*, éd. Olivier Dumas, Piero Gondolo della Riva et Volker Dehs, Genève, Éditions Slatkine, t. III, 2002, p. 252-253.（なお，「地理の描き方」と訳した部分の原語は「typographie」だが，それでは意味が通らないので，「topographie」の誤記ないしは誤植であると解釈した。）

10）『シャーンドル・マーチャーシュ』の草稿（全3巻）はナント市立図書館のウェブサイト (https://bm.nantes.fr/home.html) で閲覧することができる。紙葉の右上に手書きで頁番号が記されており，第1巻は110頁，第2巻は154頁，第3巻は126頁からなる。《モナコ篇》に該当するのは第3巻の26–49頁である。

断崖の方へと駆けていく場面について，そこには草稿（第3巻46頁）によると，「数軒の家屋」のほか，「旧コルニッシュ街道とヴィルフランシュ街道のかたちづくる十字路」に「四つ辻亭」という旅籠も存在していたことになっているのだが，これらの固有名詞も，出版された刊本からは姿を消している。このようにして，《モナコ篇》の推敲の過程では，複数の地名が削られているのである[11)]。

元銀行家の錯乱状態の強調もさることながら，特に，時刻と地理の不明確化という二点について，私はこう解釈したい誘惑にかられる。すなわち，物語の舞台であるモナコが —— 他の〈驚異の旅〉の舞台とは異なって —— 多くの読者の知る土地であるがゆえに，ヴェルヌは時刻や地名を故意に言い落とし，それによって登場人物たちの足どりを曖昧かつ特定困難なものへと変貌させたのではないか，と。そして，そうすることで，もともと充分に担保されていたとは言えないトロンタルの深夜の山歩きの現実性が，モナコを知る読者たちによって，疑わしいものとして否定されるのを防ごうとしていたのではないか，と。

換言するならば，まさしくリアリズムのためにこそ，トロンタルは正気を失っていなければならなかったし，時刻は曖昧模糊としていなければならなかったし，地理は具体性を欠き，茫洋としていなければならなかったのである。

5. モナコいまむかし —— フィールドワーク2日目

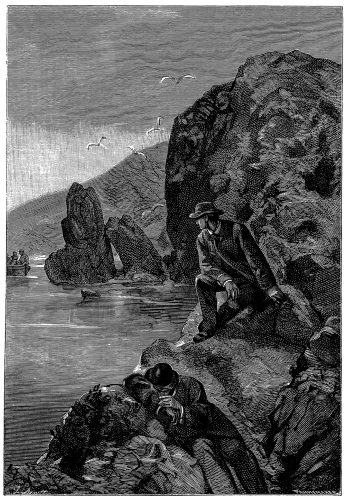
この日は，予想はしていたが，やはり筋肉痛になった。朝から体が重く，徒歩5分のスーパーで飲み物を買ってくるのにも一苦労だ。とはいえ，ラ・テュルビーやエズ方面をめぐる，という明らかに体力の要る予定は前

11） この段落で新たに言及した固有名詞の原語表記はそれぞれ「ravin de Sainte Dévote」「l'ancienne Corniche」「la route de Villefranche」「Auberge des Quatre Chemins」。

日に消化することができたので，この日は気楽である。『シャーンドル・マーチャーシュ』初版挿絵本に収録されている《モナコ篇》の挿絵がどこをどのような角度で描いたものなのかを確かめるために，まずはモンテカルロへ出かけた。

《モナコ篇》には6枚の挿絵が収められているが，そのうちの1枚（エザを描いたもの）はすでに紹介済みであり，ほかにも2枚，モデルとなった場所が検証しがたいものがある。カジノの賭博室を描いたもの（**図版2**）と，海岸の岩場を描いたもの（**図版3**）である。前者はTシャツしか持ってきていない私がドレスコードの観点からカジノに入れないという理由で検証不可能であり，後者は海岸が広すぎるうえ，挿絵に描かれた岩場を特定する手がかりも時間もないため，断念せざるをえない。残るは3枚，カジノのそばで立ち話をするシーラス・トロンタルとサルカニーを描いたもの，その二人のあとをつけるポワント・ペスカードを描いたもの，おそらくはモナコ港の反対側からモンテカルロの丘を描いたものである。

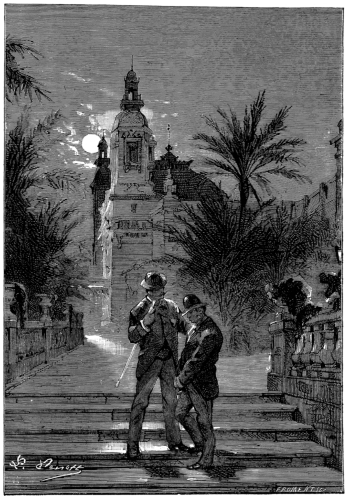
図版2　賭博室



図版3　海岸の岩場

まずは，場所の同定がいちばん簡単そうなカジノへと向かう。カジノの表玄関は建物の北西側（山側）にあり，1864 年開業の由緒正しきオテル・ド・パリや高級ブランドショップが軒を連ねるそちら側は，いかにも華やかではあるのだが，挿絵はどうもそのあたりを描いたものではないようだ。というわけで，カジノの外側をひとまわりし，挿絵の風景にぴたりと重なる角度を探してみる。すると，どうやら建物の南東側（海側）を北東の方から描いたものらしいということに気がつく。現在とは異なり，1880 年代にはこちら側にカジノの表玄関があったのだろうか。少なくとも，私が訪れたその日に限っていえば，南東側は工事中であるうえに殺風景で，いかにも裏口といった雰囲気が漂っている。観光客も，散策者も，あまり見当たらない。ともあれ，幸いなことに，カジノの外観そのものはあまり変わっていないようなので，挿絵とおおむね同じ角度から写真を撮ることができた（**図版 4** と**写真 4**）。ヤシの木が，いまでもそこここに生えているのが何となく嬉しい。

写真 4　カジノ



図版 4　カジノのそばで話すサルカニー（左）とトロンタル

もう一枚，ポワント・ペスカードが賭博師たちを尾行している挿絵（図版5）もまた，カジノ付近の散策路を描いたものだと思われるので，辺り一帯を探してみたのだが，それらしい場所を見つけることはできなかった。おそらく開発によって失われ，現存していないのだろう。ただ，じつはこの挿絵にはそもそも奇妙な点があり，本来であればサルカニーとシーラス・トロンタルは，この場面ではホテルのある南西の方角へと向かっていなければおかしいのだが，海と山の位置関係から分かるとおり，二人は明らかに北東へと移動している。当時はカジノの建物の海側に，いったん北東に向かってからカーブして南西の方へと戻っていく散策路でもあったのだろうか。あるいは，画家であるレオン・ブネット (Léon Benett, 1839-1916) が地理を考慮に入れることなく適当に描いた挿絵だったのか。

残る一枚は港の反対側からモンテカルロを描いたものなので，そちらに移動する。途中，カジノからラ・コンダミーヌ地区にかけては坂道を下ることになるのだが，ヴェルヌの記述によると，トロンタルとサルカニーが

図版5　二人組を尾行するポワント・ペスカード

宿泊していたホテルはその坂道の途中にあるという。

> 二人はモンテカルロからラ・コンダミーヌ地区へと下る道の途中のホテルへ戻っていった。〔429〕

ただ，このホテルについては以下のような記述もあるので，坂道の「途中」というよりは「上」の方に建っていたのかもしれない。

> ラ・コンダミーヌ地区からモンテカルロまでは，馬車で景観のいい坂道を登っていけばいい。坂の上には個人の邸宅やホテルが建ちならび，その内の一軒がまさしくサルカニーとシーラス・トロンタルの泊まっているホテルである。彼らのアパルトマンの窓からは，ラ・コンダミーヌ地区からモナコの上方までを眺めわたすことができ，視界は「犬の頭」に至ってようやくせき止められる。この番犬の頭部は地中海に向かって問いを投げかけているように見え，まるでリビア砂漠のスフィンクスのようである。〔430〕

ホテルの部屋には海を見下ろす「バルコニー」が付いている，ということが小説の一節から分かるので，読者はそこが海にほど近いリゾートホテルであるということを理解する。立地といい，雰囲気といい，現在のモナコでいえばオテル・エルミタージュがぴったりだと思うのだが，このホテルは 1880 年代にはまだ存在していなかったようなので，トロンタルとサルカニーの宿泊先はここではありえない。かつては同じ位置に，別の高級ホテルが建っていたのだろうか。あるいは，カジノに少し近すぎるような気もするが，ヴェルヌがモデルにしていたのは 1864 年開業のオテル・ド・パリなのか。

なお，「犬の頭」というのはモナコの上方にそびえる変わった形の岩山

であり，小説中にはさらに以下のような記述もある。**写真5**はまさしく「モンテカルロからラ・コンダミーヌ地区へと下る道の途中」で撮ったものなのだが，正面の山が「犬の頭」に見えるだろうか。

> その上方，右手に目をやると雄大な山が出現するのだが，海を向くその横顔のせいで，これには「犬の頭」という名前がつけられている。その頭頂部，海抜542メートル地点に姿を見せる要塞は，難攻不落と言っていいものであり，さらにフランス領であるという栄誉にも浴している。このあたりが，周囲をフランスに囲まれたモナコ領のいちばん端なのだ。〔430〕

続いて，モナコ港をぐるりと迂回し，大公宮殿のある旧市街，モナコ＝ヴィルへ。「モンテカルロ ―― 概観」というキャプションの付けられた挿絵（**図版6**）は明らかにこちら側から描かれているので，同じ角度でモンテカルロの丘が臨める位置を探す。しばらく歩きまわっていると，挿絵の右下に描かれているアントワーヌ要塞の城壁の一部が，いまもなお残っていることに気がつく。大きな木々が増えているせいか，あるいは要塞の一部が公園として整備されてしまったせいなのか，挿絵と完全に一致する構

写真5　犬の頭

図でモンテカルロが臨める位置は見つからなかったのだが，人目を忍びつつ，塀の上によじのぼって何とか近似した角度から写真を撮り，アントワーヌ要塞の城壁とモンテカルロのカジノを同じフレームに収めることができたので，ご覧いただきたい（**写真 6**）。モナコ港のこちら側には港湾施設，とりわけクルーズ船の停泊する埠頭が増えてしまっているし，あちら側にもまたビルが林立していていまいち分かりにくいのだが，目を凝らせば何とか判別できるだろう。

そんなふうにして，この日はモナコ公国内を大いに歩きまわりながら，レオン・ブネットによる挿絵が描かれた場所の —— ないしは，この画家が参考にしていたという写真や絵葉書に表象されていた場所の —— 同定に勤しんだのだった。

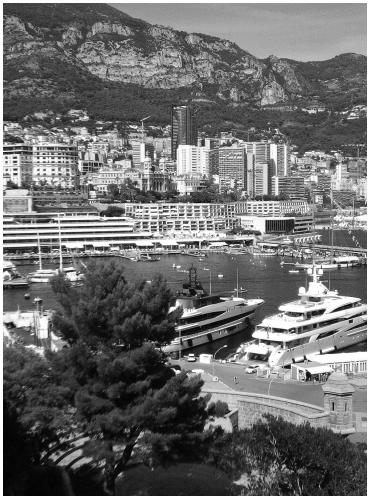
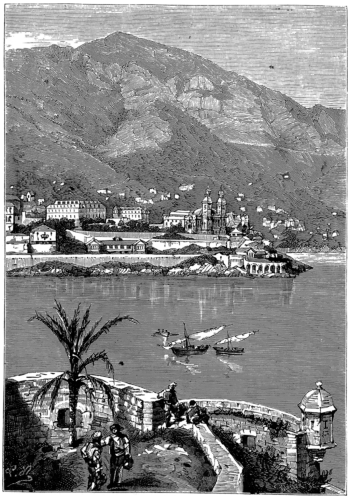


写真 6　アントワーヌ要塞から臨むモンテカルロ



図版 6　モンテカルロ —— 概観

6. 旅の終わり

翌15日は午前中にモナコをバスで発ち，ニースで電車に乗り換えて，モンペリエに帰った。途中，風光明媚な海岸沿いを通ることで有名なそのバスは，エズを過ぎたあたりから，プティ＝タフリック，ボーリュー，ヴィルフランシュ，という順で，ヴェルヌの《モナコ篇》にもその名が言及されている土地を通過していく[12)]。地中海はとにかく美しく，9月半ばにしてなおも休暇中であるらしき人々がそこここで海水浴に興じている。

> プティ＝タフリックの急斜面の下にはボーリュー港の灯，ルーズ山のふもとにはヴィルフランシュ港の灯という具合に，あちこちに港の灯火が輝いており，さらに，漁船の舷灯もいくつか沖合の静かな海面に反射していた。〔451-452〕

ヴィルフランシュ（**写真7**）という地名は，『シャーンドル・マーチャーシュ』の草稿にはあと数回書きこまれていたのだが[13)]，地理を正確に描かない方がいいというエッツェルの助言の効果なのか，最終的には抹消されている。その結果，上の引用箇所がこの港町の名前への唯一の言及である。

電車の窓からは，カンヌを過ぎたあたりから「黄金の断崖」とも呼ばれるコルニッシュ・ド・レステレルの赤い斑岩の岩場が鮮やかに目に飛びこんでくる。モナコやエズからはやや離れているが，《モナコ篇》の末尾でヴェルヌが描いていた奇妙な岩場のモデルはこのあたりなのではないだろうか。

12）ここで言及した地名の原語表記はそれぞれ「Petite-Afrique」「Beaulieu」「Villefranche」。

13）例えば，《モナコ篇》の終わり近くの草稿（第3巻48頁）を参照すると，「ヴィルフランシュ港とそれをかたちづくる小さな湾を少し過ぎたあたりで」という表現が横線で消されているのが見つかる。

何度となく命の危険を冒した末に，二人〔ポワント・ペスカードとカップ・マティフー〕は海面と変わらない高さにある最後の岩場までたどり着いた。付近の海岸線には，砂岩の塊を不規則に切り抜いたような小さな入江が連なっていた。入江はどれも赤みがかった高い岩壁にふさがれ，鉄分を含む暗礁に縁どられているため，寄せては返すさざ波が血の色に染まっていた。〔453〕

この一節は，何度読み返しても情景がうまく想像できなかった箇所なのだが，「赤みがかった」岩場を実際に目にすることで，ようやく得心がいった。

コート・ダジュール，プロヴァンス地方を電車で突っ切って，モンペリエに帰還。顕著な成果があったのか否か，いまいち判然としない３泊４日の調査旅行がこうして終わりを告げた。

結局，エステル岬には行きそびれたので，モンペリエ滞在中にもう一度モナコを訪れてリベンジを果たせればとも思ったのだが，秋に入ると南仏は大嵐の被害を受けて鉄道が長期間不通になり，冬には交通機関のストライキ（フランス史上最長記録を更新）のせいで鉄道が長期間不通になり，それが下火になるころには新型コロナウイルスがヨーロッパで猛威を振るい

写真７　ヴィルフランシュ

はじめてもはや旅行どころではなくなり，残念ながらモナコへの再訪は果たせずに終わった。

7. 結びに代えて

昨年の9月半ばにコート・ダジュールで行った『シャーンドル・マーチャーシュ』《モナコ篇》をめぐるフィールドワークの報告は以上である。本稿の冒頭に掲げておいた二つの目的は，完璧に，とは言えないまでも，どちらもそれなりには達成できた。シーラス・トロンタルの足どりを追うことで，ヴェルヌのリアリズムへの気遣いが仄見えてきたし，ブネットの挿絵に描かれた場所も，いくつかはかなりの精度で同定することができた。

願わくば，〈驚異の旅〉の舞台となった他の場所についても，機会があれば同様の現地調査を実施したいものである。調査のどこかしらでつまずき，言わば「歩きそこねる」のは不可避であるとしても，実際に歩いてみなければ見えなかったはずのものが，いくつも視界に現れてくることだけはまちがいない。おそらく，文学作品を読むこととその作品の舞台を歩くこととのあいだには，幸福な相互補完の可能性がつねに横たわっているのである[14)]。

［付記］　本稿に掲載されている写真はすべて筆者が撮影したものです。

［謝辞］　本稿に掲載されている『シャーンドル・マーチャーシュ』初版挿絵本の挿絵の画像データはすべて新井書院の新井浩二様にご提供いただきました。心より感謝申し上げます。

14)　この方面における優れた先行研究として以下の書物が挙げられる。新島進編『ジュール・ヴェルヌが描いた横浜』，慶應義塾大学教養研究センター選書，2010年（特にその第2部「『80日間世界一周』と横浜」）。